

ボランティアが及ぼす教育効果の実際 — 学生の主訴を中心に —

Educational Effects of Volunteer Work: A Record of Students' Impressions

(2008年3月31日受理)

寺山 節子
Setsuko Terayama

Key words : ボランティア, 教育効果, パーソナリティ, 発見, 成長

要 旨

本稿はボランティアがもつ教育効果について1症例を基に報告したものである。

本来ボランティアがもつ特性, その活動をとおしての主体性の確立と, 対人との係わりの中で培う豊かな心の芽生えが本稿の対象とした学生に顕著に現れた。そのことは, 本人が質問紙の中で, ボランティア活動を行ったことで自分の道が開けたから「青空のような青だ」とその色をととえている。本人が20回のボランティア体験で自信と明るさを手にしたことと, その教育効果をこの報告で伝えたい。

I はじめに

1995年1月7日に起きた阪神淡路大震災では, 多くのボランティアによる救助活動の様子がメディアを通して伝えられ, 「ボランティア元年」「ボランティア革命」などという言葉を生んだ。そして, 大きな感動と共にその言葉が定着した。

以降, ボランティアへの関心が高まる中, 多くの大学でも, 「ボランティア人間科学」, 「公共政策学」, 「国際援助学」, 「ボランティア論」, 「市民援助論」, 「地域共生論」などという講義科目も生まれた。ただし, ボランティアは「学ぶ」ことだけで終わるのでは無く, 実際の活動の中でその効果を発揮するものであるから何らかの形で実践へと繋げなければならない。

中国短期大学総合生活学科, ヒューマンケアコースで, 「訪問介護員1・2級」の資格取得を目指している学生は, ボランティア活動が義務づけられている。講義をとおしての「学び」のみではなく, 多くの実践体験からの「教育効果」を意味することがその目的である。

筆者は, 1症例ではあるが, ボランティア活動をとおして貴重な「学び」を体験し, 自己の生き方にその効果を発揮したある学生の主訴に基づく報告をし, その活動の課程や結果から教育とボランティアの関係を考える視点をここに提供したい。

II 研究の目的

筆者は, 中国短期大学総合生活学で行われている「現代生活とマナー」という講義科目の中で, ボランティアに関するアンケートを行った。ボランティアのイメージについて聞いたものであるが, 多くの学生から「人のために役立つこと」という回答を得た。その中で74名中1名ではあったが, 「与えるもの・与え合うもの・ありがとうとこちこそ」という回答を得た。

最近, 筆者は教育ボランティア(ここでいう教育ボランティアとは広義の学生に対する教育的なボランティアをさす)についてその意味と課題に直面していたので大変その回答に興味をもった。教育とボランティアを考え

る際に重要なことは、ボランティアがもつ「相手を助ける」「相手に何かを与える」という特性の上に成り立たなければその側面に隠されている次の効果に触れることができない。その効果とは、その活動から自分が受け取れるものがあるという点である。

ここで紹介する1症例は、合計20回のボランティア活動（特に後半に行った15回のボランティア活動）でその教育効果が顕著に現れた学生の報告である。「何かをしたい」という意思がボランティアの出発点と考えるのであれば、この症例は何かをしなければならないというところから出発していることをここであえてふれておきたい。また、その効果は20回のボランティアを経験した全員の学生に顕著に現れたことではないことも重ねてふれておきたい。そして、その教育効果は本人のもつパーソナリティとも大いに関わりがあるのではないかという報告もここで同時に行いたい。

Ⅲ 研究の方法

(1) 研究対象

中国短期大学総合生活学科ヒューマンケアコースの学生(9名)の内、20回のボランティア活動終了後、主体性や積極性が確立され、人と係わることに對して臆病でなくなったことが顕著に現れた学生。授業中の発言も多くなり、発言時においては心の動揺も

【エゴグラム (図-1)】

状況や場面によって異なる、人間の心のありようをグラフにしたもの。交流分析では心のありようを、父心 (CP: 毅然さ)、母心 (NP: 思いやり)、大人心 (A: 損得勘定を考えるような現実検討)、自由な子ども心 (FC: 天真爛漫、無邪気)、従順な子ども心 (AC: 従順、ブリッ子) の五つの視点からみていく。

ほとんど見られなくなった学生1名を本研究の対象とした。

(2) ボランティア活動期間

平成19年3月 (5回)

平成19年7月～9月 (15回)

(3) 研究方法

質問紙による自記入及び口答回答と聞き取り。(平成20年2月25日に実施)

(ボランティアに関する質問とエゴグラム作成)

(4) 倫理的配慮

今回取り上げた症例の報告は本研究のみに使用し、報告した内容は本人の主訴を主体とした報告にとどめる。プライバシーに配慮し氏名の公表はしない。報告には細心の注意をはらい研究対象者が特定されないようにした。

また、本人に研究の目的・方法を説明し、承諾を得て行ったものである。

Ⅳ 結果と考察

まず本症例の心のありよう(交流分析)を図-1にし、最初にふれておきたい

(エゴグラム)。

表-1は本人に対して行ったボランティアに関する質問とその回答を列挙し表にしたものである。

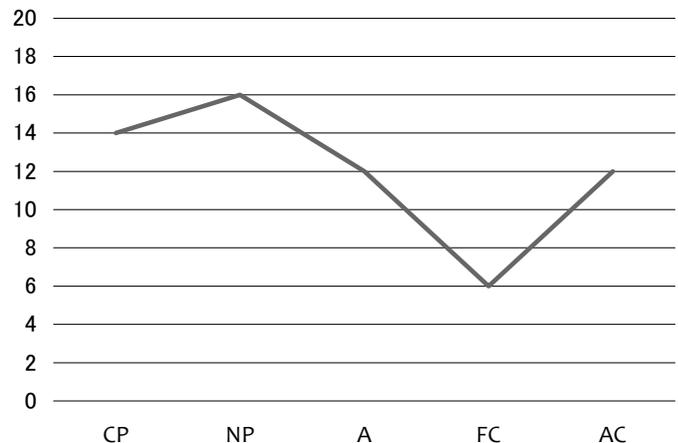


図-1 対象者のエゴグラム

*エゴグラムの見方 (本人はN型である)

N型の特性は自分を抑えてでも人に尽くすタイプである。言いたいこと、したいことが十分に表現できないためストレスがたまりやすいタイプ。

表-1 ボランティアに対する質問と返答

| | 質問内容 | 返答内容 |
|----|---|--|
| 1 | ボランティアを始める前はどんな気持ちでしたか。 | 授業で学んだことを通して、色々なことを学び身につけていきたいという気持ちだった。 |
| 2 | ボランティアを始めて、どんな気持ちになりましたか。 | 最初は友人・両親に相談した。それからアドバイスをもらい、自分で切っ掛けを作り頑張ろうという気持ちになった。友人からもボランティアはした方がいいよと言われていたのでいい経験だと思った。 |
| 3 | ボランティアを始める前と後で、何か気持ちの変化はありましたか。 | 最初は不安だったが、終わる頃には自信が持てるようになり、勇気を出して頑張れた。色々なことに対して前向きに考えられるようになった。 |
| 4 | ボランティアに活かした特技や趣味はありましたか。 | なかった。 |
| 5 | ボランティアをするにあたって、協力してくれた人がいましたか。 | 両親と友人 |
| 6 | ボランティアをして何か得たことはありましたか。 | アドバイス・励ましのメッセージなどをいただき、前向きに考えられるようになった。周りの人も、そう言ってくれるようになった。 |
| 7 | ボランティアをして何かマイナスなことはありましたか。 | 最初の5回くらいのボランティアでは、挨拶さえできないまま終わってしまい、叱られたことで自分の印象が悪かったこと。悔しくて涙が出た。でも、1人の職員の方が手紙をくれ励ましてくれた。その手紙は今でも大切に持ち歩いている。 |
| 8 | ボランティアの効果とは何だと思いますか。 | 勇気と自信（人との接し方が上手くなったと周りの人に言われるようになった） |
| 9 | ボランティアを途中で辞めたいと思ったことがありましたか。 | 職員の方々や実習に来ていた人たちと話ができたことで、辞めたいと思ったことはなかった。 |
| 10 | ボランティアをする時に決めた自分のルールはありましたか。 | ルールを決めずに「何でもやります」ということを言った。そのことは、積極性があるとほめられた。 |
| 11 | ボランティアをする時に努力したことはありましたか | マナーに気を付けること、時間を守ることなど |
| 12 | 自分は成長したと思いますか。 | 思う。自分でやらないといけないという自覚ができてきた。 |
| 13 | ボランティアをしている時に嫌なことがありましたか。 | なかった。 |
| 14 | ボランティアをしている時に、良かったことや楽しかったことはありましたか。 | 話をするということが苦手であったが、人々との交流があり、多くの話ができたこと。 |
| 15 | ボランティアを始める前と後で、あなたは変わりましたか。また、どんなふうに変りましたか。 | 話ができるようになり、自信が付いて、明るくなった。 |
| 16 | ボランティアについて何か意見がありますか。 | 「ボランティアはした方がいい」、色々な世界が見えてくるから。 |
| 17 | ボランティアはあなたにとって何ですか。 | チャンス。自分自身を振り返ることのできる切っ掛け。幸運をもたらしてくれる。 |
| 18 | ボランティアを色にたとえると何色ですか。 | 青空のような青。ボランティアと出会って、道が開けたから。 |

次に、本人は高齢者福祉施設で20回のボランティアを行ったことも付け加えておきたい。

最初、本人は地域の社会福祉協議会のボランティアセンターを訪ねて行っている。そこでボランティアをしたいという意思を伝え、コーディネーターから施設名が列挙されている資料をもらっている（この時は友人が同行

し、ほとんど友人が段取りをしたとのこと）。

第1回目のボランティア先を見つけるにあたっては、資料を参考に母親が直接施設に電話をかけ、本人に代わって申し込みを行っている。後で、担当のボランティアコーディネーターから「ボランティアを行うのは自分なのだから今度は自分で電話をかけてくるように」とい

う助言があったとのこと。本人はその時の様子を恥ずかしそうにそして、「やっぱりな」と話してくれた。

合計20回のボランティアの内、最初の5回は本人は挨拶さえできないまま終わってしまい施設職員に叱られた印象しかなく辛く、そんな自分が情けなく泣いたと訴えた。

しかし、1人のある職員が手紙をくれ励ましてくれたことがとても嬉しく、あの時の自分を忘れないように今でもその手紙は持ち歩いていると話してくれた。そして、本人はその手紙をお守りだとも言った。辛いことがあったりすると未だに出して読んでいるとのことである。質問7ではそのことが明らかになった。(筆者は期待していたが、最後までその手紙を見せてくれることはなかった)。

また、質問11では、ボランティアを行う時、努力したことは何かと聞いたことに対して、基本的なマナーを守ることだと本人は即座に答えた。最初の5回のボランティアでは挨拶すらできず辛かったことが印象深く、そのことを努力したことが伝わってくる。約束や時間を守ることは基本の基本である。約束や時間を守ってこそ信頼を勝ち取って活動も行い易くまた、楽しくなってくる。ボランティアは、何か特別な精神や考えで行うものではないが遊びではない。「ボランティアだからいい加減でいい」という話を時々聞くが、種類や程度の差はあるが、他者との関係がある以上、必ず責任が伴うことを忘れてはならない。本人はこのことを少しずつ努力しながら残り15回のボランティアでは職員との信頼を育てていったようである。その中で、叱られたという言葉は筆者は本人の口から聞くことはなかった。

質問14ではボランティアをして良かったことや楽しかったことを聞いた。話をすることが苦手で苦痛だった本人が、この質問ではそのことが楽しかったことだと言って変化してきている。質問15では、話ができるようになって自信ができ自分が明るくなったと変化について語った。質問紙上では現れていないが、本人が「ボランティアは自分の弱いところに気づきそのことを考えるきっかけを与えてくれた」と語ったことが筆者は忘れられない。

最後の質問18では、本人はボランティアは自分の道が開けたから、「青空のような青色」だとボランティアに

対する色のイメージを語ってくれた。

V 終わりに

今回の報告は、ボランティアの定義や仕組み、その意味とするところや社会との係わりについて検討したものではないことをもう一度ここで述べておきたい。

しかし、そうは言ってもボランティアの一番中心とするところは「自発性」である。自発性をもって誰か他者の役に立ちたいと思う心を持ってまずは臨むことである。そして、学校教育の中で教育効果を意識してボランティア活動を義務付ける場合、指導者(ここでは筆者)が自らボランティアを体験し、その教育的な効果を身体と心で感じていなければならないことも大事である。

本研究は最初自発性に欠けていた対象者が、20回のボランティア活動をとおして徐々に自発性や主体性を確立し、そこで出会った職員や施設入所者との交流をとおして勇気と自信を身につけることができた報告であった。

結果、本人はそのボランティア先を就職先に選び、自らの努力で内定をもらった。本人の努力効果と正にボランティアのもつ主体性確立効果の相乗効果ではないだろうか。

しかし、ボランティアの美名のもとに、しているものが、相手に何かをしてあげているという考えをもったり、やらなければならない団体がボランティアに依頼することでそのことから目をそむける結果になったりしてはボランティアの存在が逆効果になることを忘れてはいけない。

最後に、本人がもつパーソナリティー(図-1対象者のエゴグラム)がボランティアの教育効果にどのように係わってくるかについては、本研究の本意とするところではないので参考にする程度にさせていただければ有り難いと思う。

ここに本人が書いてくれた自筆文章を載せ本研究の報告を閉じたいと思う。

中村和子・杉田峰康著
チーム医療

ボランティアで体験したことが私の心の支えとなり、資格取得を目指す気持ちになれました。
近所の高齢者の方々ともふれあう機会が増え、自分を見つめ直すことができました。
これからは、授業とは違い、施設の員として働き、自分の仕事に励んでいきたいと思っています。
ボランティアを終えて自信がつかれました。今までは頼ってばかりでしたが、ボランティアをしてより自覚がもてました。これからは、社会人としての役割をしっかりと果たしていきます。ボランティアでのことも忘れず役立てていけるよう努力します。
就職も決まり、第一歩を踏み出そうとしています。学生時代のことを思い出しながら、何事にも勤めていきたいです。
ボランティアありがとう」といふ気持ちでいっぱいです。

中国短期大学

9. 6. 5,000

VI 参考文献

- 1) 「ボランティア学を学ぶ人のために」
内海成治・入江幸男・水野義之編
世界思想社 (2006)
- 2) 「ボランティア学のすすめ」
内海成治編著
昭和堂 (2003)
- 3) 「ボランティアのすすめ」基礎から実践まで
岡本栄一監修 守本友美・河内昌彦・立石宏昭編著
ミネルバア書房 (2006)
- 4) 「ボランティア論」
藪田 哉著
ヘルス・システム研究所 (2004)
- 5) 「自分と向き合う究極のエンカウンター」
國分康孝・國分久子編著
図書文化 (2004)
- 6) 「わかりやすい交流分析」

